

# 日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.12

『尾崎喜左雄氏の古墳時代研究と渋川(1)』

東国古墳時代研究の先駆者尾崎喜左雄氏と渋川の関係は非常に深いものでした。その関係について、今回から3回に分けて紹介します。

尾崎氏は、昭和11年に東京大学文学部国史学科を卒業後、群馬の地にやって来ました。その目的は、昭和10年に全国に先駆けて実施された県下一斉の古墳分布調査の成果をまとめ上げるためでした。東



一般の人に遺跡の説明をする尾崎喜左雄氏  
(昭和48年頃)

京大学では古代史専攻だったため、考古学は初めてで、一抹の不安がありました。が、「古墳から地域の古代史解明の資料を得る」という新たな目標を立て、積極的にこの事業推進に取り組みました。この分布調査では、8423基の古墳が確認されました。尾崎氏は、その全ての古墳を訪れ、自らの目と足で確認することにしました。これにより、群馬の土地感を早くも身に付けたわけです。その中で、北群馬・渋川地域では、確認された古墳が非常に少ないことに薄々気付いたようです。

尾崎氏は、当初求められた古墳総合調査の成果を『上毛古墳総覧』にまとめ上げた後も、群馬県師範学校(後の群馬大学教育学部)教授に就任し、群馬の地にとどまり古墳研究を続けていく決心をしました。そのような中、昭和29年に尾崎氏の古墳研究に大きな影響を与える決定的な古墳と出会うことになりました。旧子持村の伊熊古墳です。古墳のすぐ近くにある中学校の先生(尾崎氏の教え子)から、この古墳の情報を知らされたのがきっかけです。伊熊古墳は、2m以上の厚さの榛名山の噴火による軽石層ですっぱり完全な形で埋まっていました。

(群馬県立歴史博物館 特別館長 右島 和夫)